

## 籠手田定経の故実受容

加賀前田家伝来の典籍・文書等を伝える尊経閣文庫（東京都目黒区駒場）には、戦国期大宰府の山城・岩屋城関係の史料が残されています。「聞書秘説」（全10冊）および「書札事」がそれで、天文4（1535）年7月から11月までに作成され、いずれも奥書に「宰府岩屋城において飯田石見守殿に尋ね申し候聞書なり」と記して籠手田定経の署判が据えられており、飯田興秀から聞き取った故実の内容を定経自信が記したものと考えられます。

飯田興秀は大内氏奉行人で、当時筑前御笠郡代として岩屋城に在城していました。天文初年の大内氏と少弐・大友氏の争いを契機に興秀は九州入りしたようで、天文3年には小城三津山陣において定経に故実を伝えています。彼は大内氏の重臣であるとともに、文化人としても名高く、弓馬の故実をはじめとする武家故実家としても知られた人物でした。

一方の籠手田定経は平戸松浦氏の家臣で、大内氏と松浦氏が通じていた関係で天文初年からの戦闘に参加していたようです。武家故実の受容に非常に



熱心で、肥前の土豪志自岐縁定、大内氏家臣の飯田興秀・臼井興久、室町幕府政所執事伊勢氏の被官の蜷川道運など、多数の故実家から故実を伝授されていることが明らかにされています。

また、「流鏑馬日記」という故実書の奥書を見ると、応永29（1422）年に小笠原持長が記した故実書を伊勢貞宗・貞陸が伝え、天文4年7月17日に定経の懇望により興秀自ら写し与えたことが記されています。「岩屋城」とは記されていませんが、時期から考えて、これも岩屋城において行われた故実伝授でしょう。

小笠原流・伊勢流など中央における武家故実が山口の大内氏へと伝授され、さらに籠手田氏のような地方武士まで伝わったことは、当時の武士にとって故実がいかに大切であったかを物語ります。また戦場は戦国武士にとってコミュニケーションの場でもあったようで、故実書を当時戦場だった九州に持参した興秀、またそこで故実を受けた定経の姿は興味深いものです。